

# 経済情勢

## 概

## 観

### 海外

#### ◇高原景気へ進む世界経済

アイゼンハワー大統領は7月初め第2四半期の米国国民総生産が年率5,030億ドルと前期比30億ドルの増加を示したことを発表し、米国経済が引続き着実な上昇を示していることを明らかにした。当面季節的に経済活動の鈍化する夏場を迎え、鉄鋼操業率の不振、耐久財工業の受注減、消費者心理の慎重化なども伝えられて、下期の景気動向に対する関心が一段と高まっているが、景気要因としては有力な上昇要因も下降要因も見当らず大勢としては高原状態を続けるものと予想されている。

一方西欧経済は旺盛な国内需要と欧州共同市場を中心とした貿易の拡大にささえられて、引続き活況を呈し、各国とも前年を10%内外上回る高水準の生産を続けている。しかもイタリアを除けば各国とも完全雇用状態にあり、労働力の不足に基因する賃金の上昇からコスト・インフレに対する懸念が高まっているが、とくに西ドイツ、英国においてこの傾向が強い。

6月2日西ドイツが公定歩合引上げ、支払準備率引上げなどの総合的な金融引締め政策を発表したの続き、6月23日には英国が公定歩合、特別預金預入率の再引上げなど、予想外に強力な金融引締め政策を断行した。英国が今回の景気循環において、さる1月の公定歩合引上げ以来、一連の予防的金融政策を着々と打ち出してきたことは、英国としては全く画期的な金融政策の運用と言わねばならない。これは貿易自由化の進んだ現在、国内のインフレ傾向を早めに抑制することが、国

際競争上不可欠の要請となってきたことを示すものにほかならない。

フランスにおいては1958年末の経済安定計画の線に沿って引続き健全財政、健全通貨の方針が堅持され、またイタリアでも外貨流入に伴う国内の過剰流動性吸収のため量的引締め措置がとられており、両国経済は引続き国際収支の黒字基調を維持しつつ着実な安定成長を達成しつつある。

以上のごとく欧米各国ともすでに高水準に達した現在の景気を持続するため、弾力的に金融政策を運用しつつあるが、これを映じて昨年中急速な上昇過程をたどってきた世界経済も漸次高原景気へ移行の様相を示しつつあり、国際商品市況も年初来概して騰勢鈍化の傾向をたどっている。このように各国の景気が若干のタイム・ラグを伴いながらも大勢として同じ安定成長の方向をたどりつつあることは、交換性回復後の世界経済の新傾向を示すものとして今後の動向が注目される。

### 国内

#### ◇経済活動に落ち着き模様

最近の商品市況をみると、従来比較的底堅い動きを続けてきた織物、珪素鋼板、化学製品の一部など2次製品関係に軟化気配がみられはじめた反面、これまで下げ幅の大きかった綿糸、毛糸、形鋼、丸釘、黄銅棒などは逆に下げしぶりないし小反発商状を呈していることが注目される。このように商品市況は大勢としては軟調を改めていないが、6月下旬から7月にかけて繊維、鉄鋼に下げしぶりないし小戻し気配がみられてきた。これを映じて、本行卸売物価指数（食料品を除く）も保合状態となっている。その背景としては、需給実

勢が大きく変わってきたわけではなく、人気の要因によるところが大きい。しかし同時に、生産調整が若干ながらも行なわれていることの現われである点も見落してはならない。

鉱工業生産は3、4月と微減したあと5月は+1.7%となった。最近の動きをみると、月によってかなりデコボコがみられるが、ならししてみると、なお基調は強いが2月ころまでのような急テンポの増勢は若干弱まってきたようである。最終需要は引続き堅調であり、とくに設備投資はかなりのテンポでふえている。景気が全体として上昇を続けていることはたしかであるが、そうした中において、一部商品で市況軟調に対応する生産調整が若干なりとも進んでいるというのが現状であろう。

こうしたいわば自己調節的な動きと関連して注目されるのは、製品在庫の動向である。最近一部製品在庫の増勢が目立っており、生産者製品在庫率もやや高まっている。神武景気当時はこれが低い水準まで下り続け、景気反転によっては一挙に上昇に転じたのに比べ、特徴的である。しかしこの点は企業の原材料在庫保有態度の相違が大きく響いている。今回は神武景気当時とは異なって、企業の在庫政策がわりに慎重なため、生産の行き過ぎは売れ残りという形で比較的早く表面化し、それだけ大きな行き過ぎは回避されやすい状況にある。現に、生産、市況に落ち着きがみられ、景気が比較的モダレートな推移をみせているのはそのためともいえる。

6月の国際収支は、総合収支ではユーロ・ダラーなど短期資本の流入を主因にかなりの黒字を示したが、経常収支は4、5月に引続き若干の赤字が見込まれている。為替、通関面では輸出入とも引続き高水準を持続したが、信用状の動きからみると、輸入は総じて落ち着いており、生産の落ち

着きが若干ながら影響は始めているようである。もっとも輸出も好調であるが、伸び率は鈍っている。とくに今春来、対米輸出の伸び悩み（対米輸入の増大もあって為替収支尻は4月から赤字に逆転）が目立ってきたことは、米国向け輸出がわが国の総輸出の約3割を占めるに至っているだけに見のがしえない問題であろう。

#### ◇企業の手元やや引き締まる

6月の銀行券は官公吏期末手当、民間賞与の支出増大に月中553億円の発行超（前年同月494億円増）となり、平均発行高は前年同月を16.7%上回った。全国銀行貸出は月中1,261億円の大幅増加を示し、前年実績（899億円）を40%上回った（3～5月平均、前年比+20%）。決算資金が前年に比べ3割方増加したほか、大メーカー向け増加運転資金が機械、鉄鋼などを中心に大幅の増加を示した。当月の貸出が大幅であったのは輸入ユーザンス拡大による影響の一巡がかなり響いており、それを除いてみると、銀行貸出はここへきて急にふえたわけではない。大勢としては、従来の増勢基調が続いているとみるべきであろう。

一方最近の預金通貨動向をみると、昨年秋以降の貸出、1～3月の大幅増資などもあって企業の手元はゆとりを生じていたが、5～6月ごろから決算資金の支払によって流動性がやや失われる結果となっており、預金通貨の回転率も若干高まった。大企業のコスト削減も、とくに6月にはいってややぎこちなくなった例が目立つ。

以上みたように、このところ景気の推移にはかなり落ち着きが出てきた。こうした情勢を固めてゆくのが当面の課題であるが、その場合一つの問題は、企業の資金需要がなお引続き強いことであろう。この点、なお十分な注意が必要と思われる。